保育における相互作用の意義（Ⅱ）

―父・母・幼稚園教諭の三者間にみられる教育意識のずれをめぐる諸問題―

舟　木　哲　朗（島根大学教育学部）

問　　題

父・母・幼稚園教諭の三者間にみられる教育意識のずれについて前年度に行なった調査の結果は，前年度の報告書で述べたとおりである。

この調査は研究計画第１年次のもので，三者間にみられる教育意識のずれを明らかにすることが，おもな目的であった。

調査の目的はおおむね達成できたが，結果を整理し考察する過程で，さらに究明しなければならない次のような問題が出てきた。

- 三者からそれぞれ出てきた回答は，どこまでが「ほんね」で，どこまでが「たてまえ」なのか。
- 教育についての消極的な回答は，どのような理由から出てくるのか。
- 教育（身体的，知的，情緒的，性格的，社会的のそれぞれ）についての役割分担を，三者はそれぞれどのように考えているのか。
- 幼児の教育について，家庭ではどのように対処しているのか。

第２年次の調査は，上記の問題の究明をおもな目的とし，あわせて，第３年次への準備として，父母の教育意識と幼児の問題行動との関係についての検討も副次的な目的としている。

方　　法

次にあげる方法により，質問紙法で行なった。

1. 質問紙の作成

(1) 幼児の発達と教育の内容に関するもの

第１年時の質問項目のうち，三者間の意識のずれの大きかったものと消極的回答の多かったものを，身体的，知的，情緒的，性格的，社会的の各分野について，それぞれ４項目ずつとりあげた。（計１６問）なお，教育意識つまり「たてまえ」を尋ねるものであることをはっきりさせるために，文章表現を一部改めた。次に，各質問項目ごとに，消極的な回答の理由を尋ねる質問を新しく作成した（計１６問）。

(2) 教育の役割分担に関するもの

身体的，知的，情緒的，性格的，社会的の各分野ごとに，その教育は幼稚園が分担するのか家庭が分担するのかについての考えを尋ねる質問を作成した（計４問）。

(3) 家庭における幼児の教育方針や方法の決定に関するもの

第１年次の質問の文章を一部改めてとりあげ，さらに，実際にはどのようにしているかを尋ねる質問を新しく加えた（計２問）。なお，新しく加えた質問は父母のみを対象とするものである。

(4) 幼児の教育についての家庭における話し合いに関するもの

父母のみを対象とし，父母の間での話し合いの程度を尋ねるものと，意見が合わないときの処置をどうしているかを尋ねるものとを作成した（計２問）。

(5) 幼児の問題行動に関するもの

父母のみを対象とし，精神的な原因で生ずると考えられる幼児の問題行動３１項目のなかから，父母がそれぞれ自分の子どもについて該当すると考えるものをチェックすることを求めた。

対象と方法

対象は，松江市公立幼稚園（２２園）の全幼児（昭和５６年４月１日の年齢で４歳および５歳，計2,810人）の両親（父母別）およびそれらの学級担任８５人で，回収率は，父・母が90.4％，学級担任が１００％であった。

質問紙は，昭和56年10月５日に配布し，10月１５日に回収した。

回収した質問紙は，次にあげる方法で整理した後，集計とX^2検定とを行なった。

- 父母の回答については，さらに，条件を整えるために，父，母それぞれ，幼児の年齢・性別ごとの人数が同数となるように無作為に数を減じた。

このようにして集計の対象として残った数は，父・母各1,200人，学級担任73人である。

- 教育についての消極的な回答の理由は，消極的な回答をしなかった者にも（消極的な人の立場を想像して）答えてもらったが，集計にあたっては，実際に消極的な回答をした者の理由のみを対象とした。

結果および考察

第1年次の質問の文章表現を一部改めて用いた質問に対する回答（集計結果）は，数値（%）のうえで，第1年次の結果との間に若干の違いが出ている。しかし，三者間にみられる相違の傾向は，大きく変わっていない。

次に，結果を全体的にみると，父親において回答の分散が最も大きく，学級担任では一つの回答に多くが集中する傾向がみられた。

なお，多くの質問項目において，父・母・学級担任の三者間の回答の間に有意差がみられた。

以下，項目に従って結果の要点を述べて考察をこころみることにする。

1. 幼児の発達と教育に関する意識および教育の役割分担に関する意識について

(1) 身体的分野

第1年次の質問項目（8項目）のうち「運動すること」「運動の種類」「運動の技能」「手先の器用さ」の4項目を内容としている。教育に関する意識については省略し，消極的な回答をした者の理由をみると次のとおりである（消極的な回答をした者の数が20人以下であった質問項目－父・母・学級担任別－については無視する。以下同じ）。

- 運動することについては，すきなようにさせておけば自分でするという回答が多かった。
- 運動の種類については，すきなようにさせておけば自分でいろいろな運動をするという回答と，運動の種類は問題ではないという回答がみられた。
- 運動のじょうず，へたについては，やっているうちにじょうずになるという回答と，じょうずへたを問題にする必要はないという回答とがみられた。
- 手先の器用さについては，しぜんに器用になるという回答と，幼児期は無器用な時期だという回答とがみられた。

なお，学級担任においては，運動の技能のほかは，消極的な回答は僅少であった。

以上のことから，この分野については，学級担任に比べて父母が楽観的な見方をしているといえそうである。

次に，この分野の教育の役割分担については，学級担任の多数が家庭と幼稚園の両方に同等な役割があると答えているのに対して，父母は幼稚園により多くを期待しているという違いをみせた。とくに母親においてそうであった。今日幼児が置かれている環境を考慮し，また，幼稚園が意図的・計画的な教育の場として必要な施設設備をもっていることを考えるなら，父母の回答は当然のことであり，消極的かつ楽観的とみえる教育意識も，このことと関係があるかもしれない。

(2) 知的分野

第1年次の質問項目（8項目）のうち「読み書き」（第1年次は別項目になっていた）「算数」「製作」「知的教育の内容と程度」の4項目を内容としている。

教育に関する意識については第1年次の場合とやや違って，父母の消極的な回答が減少して学級担任の場合と近い数値になっている。その理由としては，今回の質問が「たてまえ」を尋ねるものであることを明確にしたことと，幼稚園ＰＴＡ研修会で知的教育を積極的に肯定する講演がなされていることの二つが考えられる。

消極的な回答をした者の理由をみると次のとおりである。

- 読み書きについては，必要が起これば自分でする。小学校へ入学したら教えてもらえる，自分でやるようになってからでないと有害，という回答がみられた。
- 算数については，読み書きの場合と似た回答がみられた。
- 製作については，自分でできる程度のことをすればよいという回答と，そのうちにできるようになる，という回答がみられた。
- 知的教育の内容と程度については，ほかに大切なものがある，自分から学ぼうとするようになってからすればよい，小学校に入学したら教え

てもらえる，という回答がみられた。

なお，学級担任においては，算数のほかは消極的な回答は僅少であった。

次に，この分野の教育の役割分担については，学級担任の多くが家庭と幼稚園の両方に同等な役割があると答えているのに対して，父母の多くが幼稚園に中心的な役割があるが父母も協力して家庭でも行なうと答えていて，大きい違いをみせている。このことについても，父母の回答が当然とみるのが妥当であろう。幼児期の知的教育をどう考えるかということについては，もちろんいろいろな見解があるが，専門家である幼稚園教諭が幼児の発達段階や個性に即して，それぞれにふさわしい教育を行ない，家庭に対して協力を求めるのが（積極的である場合も消極的である場合も）この分野の教育にとって必要なことと考えられるのである。

(3) 情緒的・性格的分野

第1年次の質問項目（8項目）のうち「おとなしすぎること」「極端なあまえ」「よくすねること」「おどおどしたり人の顔色をうかがったりすること」の4項目を内容としている。

教育に関する意識については省略し，消極的な回答をした者の理由をみると次のとおりである。

- おとなしすぎることについては，人間はだれも長所と欠点をもっているという回答と，そのうちだんだんあらたまる，という回答とがみられた。
- 極端なあまえについては，おとなしすぎることの場合と似た回答がみられた。
- よくすねることについては，そのうちだんだんあらたまる，という回答と，幼児期にはよくあることだ，という回答がみられた。
- おどおどしたり人の顔色をうかがったりすることについては，よくすねることの場合と似た回答がみられた。

なお，学級担任においては，どの質問項目についても消極的な回答は僅少であった。

次に，この分野の教育の役割分担については，三者とも過半数が中心的な役割が父母にあって幼稚園がそれに協力すると答え，次いで家庭と幼稚園の両方に同等な役割があると答えている者が多い。ただし父親においては，さらにそれに次いで，中心的な役割が幼稚園にあって家庭がそれに協力すると答えた者が15％余りあった。この分野では，教育意識においても，父親は母親や学級担任とは違う回答の傾向をみせている（第1年次の調査においてもそうであった）が，役割意識においても特異な傾向をみせた。

情緒的・性格的なものは，幼児期の教育として重要なものと考えられているが，その重要なものについて父親と母親との間に大きい見解の違いがあるとすれば，問題が大きいと考えなければならないであろう。

(4) 社会的分野

第1年次の質問項目（8項目）のうち「自立の習慣」「身近な社会の認識」「友だちを作る方法」「遊び友だちの人数等」の4項目を内容としている。

教育に関する意識については省略し，消極的な回答をした者の理由をみると次のとおりである。

- 自立の習慣については，そのうちできるようになるという回答が多数を占めた。
- 身近な社会の認識については，必要が起これば自分で関心をもつようになるという回答が多数を占めた。
- 友だちを作る方法については，自由にさせておけばじょうずに選べる。自由を尊重することが大切，幼児期には友だちの選び方は大切ではない，という回答がみられた。
- 遊び友だちの人数等については，自由にさせておけば友だちと遊ぶ，自由を尊重することが大切，友だちがいなくてもひとりで遊ぶ，という回答がみられた。

なお，学級担任においては，友だちを作る方法のほかは，消極的な回答は僅少であった。

次に，この分野の教育の役割分担については，三者とも家庭と幼稚園の両方に同等な役割があると答えた者が多かったが，父母ではその数は半数に達しなかった。次に多かった回答は父母が中心的な役割を果たし幼稚園が協力するというものであったが，数は，学級担任に多く，父親に少くなっている。そして，幼稚園が中心的な役割を果たし父母が協力するという回答が父親に22.5％あったが，学級担任では6.8％に過ぎなかった。

この分野についても，父母の意識が楽観的とい

えそうである。また，役割意識についての三者のずれは，もちろん好ましいことではない。ただし，質問紙の内容について反省しなければならないこともある。社会性として一つにまとめているが，このなかの自立の習慣は一般的には家庭の果たす役割が多いと考えられ，友だちに関しては幼稚園の果たす役割が多いと考えられている。これを一つの分野としてまとめたことに問題があったかもしれない。また，社会認識については知的分野とする見方も当然出てくる。このようなことについては，別の機会に検討してみたい。

2. 家庭における幼児の教育の方針や方法の決定および幼児の教育についての家庭における話し合いについて

家庭における幼児の教育の方針や方法の決定についてどのように考えているかについては第1年次の調査でも行ない，この結果に問題があることを報告書のなかでも指摘しておいた。今回は，再びこの質問をするとともに，実際にはどうなっているのかを尋ねる質問（父母のみ）を加えた。両方の質問について回答を比べてみると，意識のうえでは父親と母親とが相談して決めるのがよいとする回答が多数を占めたが，実際についてはその数は減少し，父親の意見を聞きながら母親が決めるとする回答が増加している。さらに，その実際について，父親の回答と母親の回答との間に違いがみられる。このことについては，本来なら父親の回答と母親の回答とが一致すべきだと考えられるはずであるのに不一致がみられ，両親の間で共通理解が完全でないことを示している。しかし，父親だけで決めるという回答も，母親だけで決めるという回答も，ともに僅少であって，両親がなんらかの形で相談して決めているものと考えられる。

幼児の教育についての家庭における話し合いは教育意識の一致度の高い父母では約$\frac{1}{4}$が常に話し合っているが，一致度の低い父母ではそれが少なかった。また，何か問題があったときには多くの父母が話し合っており，全く話し合っていないという回答はみられなかった。両親の意見が合わないときの処置の仕方をみると，教育意識の一致度の高い父母の場合は，他の家族の意見も聞いて処置すると答えた者が最も多く，それに次いで父親の意見で処置しているという回答が多かった。教育意識の一致度が中程度の父母の場合は，一致度の高い父母の場合と逆の順で2種類の処置の仕方に多くの回答がみられた。ただし，これら2群の間の違いは極端ではない。さらに，教育意識の一致度の低い父母の場合は，処置の仕方の回答にばらつきがみられた。なお，教育意識の一致度の低い父母の場合には，他の場合に比べて母親の意見で処置するという回答が多かった。このようにみると，幼児の教育については家族がいっしょに話し合うことが父母間の教育意識を一致させるのに役立ち，父母の間では父親の意見を強く出すことが教育意識を一致させるのに役立つように考えられる。ただしこれは，一致という点からのことであって，すでに述べているように，父親の教育意識が必ずしも好ましい状況にあるとは考えられないということを考慮しておく必要がある。

3. 父母の教育意識と幼児の問題行動についての父母の認識について

教育意識の一致度の低い父母ほど，幼児の問題行動についての認識でも一致度が低かった。また，教育意識の一致度の低い父母ほどわが子に問題行動があると見ている。

この項目については，今回の調査結果のなかから，以上のほかにもいろいろなものが指摘できるが，これは次年度への準備として行なったものであるので，詳細は次年度の報告に含めることにする。

発展課題

第1年次および第2年次においては，父・母・幼稚園教諭の三者間にみられる教育意識のずれを中心に，質問紙法によって得た結果を統計処理して考察を進めてきた。これは，三者間の教育意識のずれが幼児の発達に影響を及ぼすのではないかという予想（ずれが極端な場合には障害もしくは問題行動を引き起こすかもしれないという予想）をもったからである。そこで次の課題は，はたしてその予想のとおりであるかどうかを，たしかめることである。

このため，第3年次の研究においては，障害もしくは問題行動のある幼児に限定して，それらの幼児をもつ父母と学級担任の意識や育児行動を調

査し，３年間にわたる研究に一つの区切りをつけるとともに，障害もしくは問題行動を防止する方策を検討したいと思う。

追　記

この研究を進めるにあたっては，島根県立島根女子短期大学の河野としゑ教授と島根大学教育学部の深田博己講師に多大な協力をいただいた。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

問題

父・母・幼稚園教諭の三者間にみられる教育意識のずれについて前年度に行なった調査の結果は,前年度の報告書で述べたとおりである。

この調査は研究計画第 1 年次のもので,三者間にみられる教育意識のずれを明らかにすることが,おもな目的であった。

調査の目的はおおむね達成できたが,結果を整理し考察する過程で,さらに究明しなければならない次のような問題が出てきた。

・三者からそれぞれ出てきた回答は,どこまでが「ほんね」で,どこまでが「たてまえ」なのか。

・教育についての消極的な回答は,どのような理由から出てくるのか。

・教育(身体的,知的,情緒的,性格的,社会的のそれぞれ)についての役割分担を,三者はそれぞれどのように考えているのか。

・幼児の教育について、家庭ではどのように対処しているのか。

　第2年次の調査は,上記の問題の究明をおもな目的とし,あわせて,第3年次への準備として,父母の教育意識と幼児の問題行　動との関係についての検討も副次的な目的としている。